

# 海が呼んだ話

小川未明

青空文庫



じてんしやや  
自転車屋のおじさんが、こんど田舎へ帰ることになりました。

せいきち  
清吉や、正二にとつて、親しみの深いおじさんだったので。

りんしや  
三輪車の修繕もしてもらえば、ゴムまりのパンクしたのを

なお  
直してもくれました。また、その家の勇ちゃんとはお友だちでも

ありました。おじさんは、犬や、ねこが好きでした。いい人とい

うものは、みんな生き物をかわいがるとみえます。

ゆう  
勇ちゃんは、こんど田舎の小学校へ上がるといいました。

ゆう  
「勇ちゃん、田舎へいくのうれしい？」

「お友<sup>とも</sup>だちがなくて、さびしいや。僕<sup>ぼく</sup>も、お母<sup>かあ</sup>さんも、いきたくないんだよ。」

「どうして、田舎<sup>いなか</sup>へいくの。」

「おじいさんが、だんだん年<sup>とし</sup>をとつて、もう一人<sup>ひとり</sup>で田舎<sup>いなか</sup>におくことができないからさ。おじいさんは、東<sup>とう</sup>京<sup>きやう</sup>へくるのは、いやだというのだ。そして、昔<sup>むかし</sup>から住<sup>す</sup>んでいるところ<sup>ところ</sup>にいたいというので、しかたなくお父<sup>とう</sup>さんが、帰<sup>かえ</sup>ることにしたのだよ。」

勇<sup>ゆう</sup>ちゃんの話<sup>はなし</sup>を聞<sup>き</sup>いて、清<sup>せい</sup>吉<sup>きち</sup>も、正<sup>しょう</sup>二<sup>じ</sup>も、勇<sup>ゆう</sup>ちゃんのお父<sup>とう</sup>さんを親<sup>おや</sup>孝<sup>こう</sup>行<sup>こう</sup>だと思<sup>おも</sup>いました。

「この家<sup>いえ</sup>へは、親<sup>しん</sup>類<sup>るい</sup>の叔父<sup>おじ</sup>さんが入<sup>はい</sup>るのだから、僕<sup>ぼく</sup>、また遊<sup>あそ</sup>びにくるよ。」と、勇<sup>ゆう</sup>ちゃんはいいました。

「叔父さんのお家は、どこにあるの。」と、正二が、聞きま  
した。

「叔父さんの家は、ここから二十里もあちらの浜なんだ。たいだ  
の、さばだの網にかかつてくるつて、僕のお父さんが、いった。」  
「その叔父さんは、また自転車屋をやるの。」と、清吉がたず  
ねました。

「さあ、それはわからないな。」

「勇ちゃんの話しぶりでも、遠い浜から、町へ出てくるには、な  
にか子細があるように感じられたのです。しかし、そのわけは、  
わかりませんでした。ただ、にぎやかな町から、さびしい田舎へ  
帰るものと、また、ひろびろとした海の生活から、せまくるし

い町へやつてこなければならぬものと、人間の一生の暮らしには、いろいろの変化があるものだ、子供たちにも、感ぜられたのでした。

「勇ちやんの家が、田舎へ引越してしまつてから、しばらく、自転屋のあとは、空き家になっていました。」

「いつ、勇ちやんの叔父さんは、引越してくるんだらうな。」と、正二も、清吉も、閉まつている家の前を通るたびに、振り向きながら思いました。そのうちに大工が入つて、店の模様を変えたり、こわれたところを直したりしていましたが、それができあがると、いつのまにかこぎつぱりとした、乾物屋になりました。そして、チンドン屋などがまわつて、開店の披露をした

のであります。

かいさんぶつ  
海産物のほかに、お茶や卵を売っていました。おじさんとい  
うのは、まだ若く、やつと三十をこしたくらいに見えました。そ  
れにひとり者で、いつも店にさびしそうにすわっていました。

「おじさん。」といつて、清吉や、正二や、ほかの子供たち  
が、じきに遊びにいくなつたのも、一つは、勇ちゃんの叔  
父さんだつたというので、まったく他人のような気がしなかつた  
からでもありません。

なんでも珍しいことを知りたがる子供たちは、この店へやつて  
くると、

「おじさん、海の話をしてよ。」といいました。

「は、は、は。」と、無口のおじさんは、笑っています。

「おじさんは、海の底へ入ったことがある？」と、正二が、聞きました。

「は、は、は。海の中へは、毎日のように入ったし、小さな舟に乗って、遠くへ釣りにいったこともある。」と、おじさんが、答えました。

「正ちゃん、おじさんは、海へくぐるのが、名人だつて。そして、さんごや、いろんな貝や、魚など、なんでも手で取ってくる事ができるんだつて、いつか勇ちゃんがいったよ。」と、清吉がそばからいきました。

「え、おじさん、ほんとう？」



「うん、ほんとうだ。」

「海の中、どんなだい。美しい？ 水の中では、息ができないだ

ろう。」

「舟から、機械で空気を送るんだねえ、おじさん。」

「そうなんだよ。海の中は、明るくて、きれいさあ。」と、おじさんが、答えました。

「どんなに、きれい？」

「そうだな、青白く、ぼうつとして、ちよつと口にはいえないなあ。」

「いろんな魚が泳いでいるの。」

「うん、上の方には、くらげが、傘のような形をして、泳いでい

るし、すこし下の岩陰には、たこが腕組みをして、考え込んで  
いるしな。もつと下の方へいくと、赤い魚だの青い魚だのいろい  
ろのやつが、まるで林の中をくぐるように、藻の間をいたり、  
きたりしているのだ。」

「ふうん、きれいだな。水族館へいつてみたようなんだね。」

「水族館って、まだ見たことがないが、たぶん同じものだろう

よ。」

「おじさん、それでも、海よりか、町のほうがいいの？」

「それは、海のほうがいいさ。」

「そんなら、なぜ、町へ越してきたの？」

こう、子供たちが問うと、おじさんは、それには答えずに、た

だ、さびしそうに、笑わらっていました。

勇ゆうちゃんの叔父おじさんは、年としが若わかく、口くち数かずは少すくなかつたけれど、まじめでありましたから、町まちの人ひとたちもだんだんこの店みせをひいきにするようになりました。

二

ある日ひのこと、清吉せいきちのお父とうさんは、勇ゆうちゃんの叔父おじさんが、海うみの生せい活かつをやめて、こちらへくるようになったわけを、外ほかから聞きいてきたのであります。

「清吉せいきち、こんな話はなしは、あまり人ひとにするでないぞ。お父とうさんが、

あるところで聞いてきたのだからな。」

「おそろしい話？」

「清ちゃん、だまつて、聞いていらつしやい。」と、そばから、姉さんがいいました。

「ある日のこと、沖合いで、汽船が衝突して、一そうは沈み、ついでに行方不明のものが、八人あつたそうだ。あの人は、海へぐる名人だつてな。それで、たぶんその船といつしよに沈んでしまったのだらうから、中へ入つて、死骸をさがしてくれと頼まれたのだ。」

「あのおじさん、入つたのかい。」

「だれも、底が深いし、気味悪がつて、いい返事をしたものかな

いのを、あの人は、一人ひとりで入はいつたのだ。」

「えらいなあ。」

「えらいとも。」

「いいから、清せいちゃん、だまって聞きいていらつしやい。」と、お姉ねえさんが、またいいました。

「あの人は、降おりていつて、船せん室しつの内うちへ入はいつて、さがしたそうだ。けれど、一人ひとりの死し体たいも見みつからない。おかしいなと思おもつたが、上あがつてそのことを報ほう告こくした。すると、いやそんなはずはない。船ふねといつしよに沈しずんだのだから、船せん室しつの内うちにいるに相そう違いないといふので、あの人は、また海うみの底そこへもぐつたのだ。」

「怖おそろしいなあ、おじさん、気き味みが悪わるくなかつたらうか。」

「見つかったんですか。」と、いつしよに、お父さんの話を聞いていらしたお母さんが、いいました。

「また、船室へ入って、すみからすみまで、懐中ランプで照らして、さがしたけれど、やはり一人の死体も見つからない。まったくおかしなことがあるものだと思って、あきらめて出ようとしたとたん、ちよつと上を見ると、八人の死体が、ぴつたりと天じようについて、じつと自分の方を見下ろしていた。このときばかりは、さすがに、あの人もぎよつとして、もうすこしで後ろへひっくり返りそうになった。それから、潜水業というものが、いやになって、陸で暮らしたいという気が起こったという話なんだよ。」

お父さんとうの話はなしは、終おわりました。

聞きいていたお母さんかあも、お姉さんねえも、清吉せいきちも、

「そうだったでしょうね。」と、そのときの、おじさんの気持きもちちに、同どうじょう情じょうされたのであります。

清吉せいきちは、このことを、おじさんの店みせへ遊あそびにいつても、けつして、口くちにはしなかつた。おじさんが、そのことを思おもい出だすと悪わるいと思おもつたからです。

### 三

自じてん転しゃや車あと屋あとの後あとへ乾かん物ぶつ屋やができてから、二にか月げつばかりたつと、

勇ちゃんゆうちゃんの叔父おじさんは、不思議ふしぎな病氣びょうきにかかりました。それは、ふいに原因げんいんのわからぬ熱ねつが出て、手足てあしがしびれてきかなくなるのでした。とりわけ、西にしの空そらが夕ゆう焼やけけをする、日暮ひぐれ方がたに熱ねつが出て、出るでというのであります。そして、近所きんじよの医者いしやに見みてもらったけれど、なんの病氣びょうきかわからないというのでした。このことが、また近所きんじよのうわさになったのです。

「勇ちゃんゆうちゃんの叔父おじさん、きょう病院びょういんへいったよ。」と、正しょう二じが、いいました。

清吉せいきちと正二しょうじは、学校がっこうの帰かえりに、乾物屋かんぶつやの前まえを通とおると、おじさんが、店みせにすわっていました。二人ふたりは、入はいつてそばへ腰こしかけました。



「おじさん、顔色かおいろがわるいね。」

「病院びょういんへいって、見みてもらつてきたの？」

おじさんは、二人ふたりの子供こどもの顔かおを見みて笑わらいながら、

「海うみが、おれを呼よぶんだよ、子供こどもの時分じぶんから、水みずをもぐつてきた

ものが、陸おかへ上あがりきつてしまふと体からだがきかなくなつて怖おそろしい

ことだな。」

「そんなら、おじさん、また海うみへ帰かえるの。」

「ああ、海うみへ帰かえつて、もぐりたくなつた。そうすれば、体からだもじよ

うぶになるといふことだ。そうしたら、二人ふたりとも遊あそびにきな。浜はま

は風かぜがあつて、夏なつは涼すずしいぜ。えびでもたこでも、新あたらしい魚さかなを食た

べさせるから。」

「おじさん、このお店はどうするの。」

「この家か、また前の人たちがきて入るだろう。やはり、急に町から、田舎へいっても暮らしが立たないのだよ。」と、おじさんが、いいました。

「そんなら、また、勇ちやんと遊べるんだね。」と、正二は、につこりしました。店を出ると、

「僕、おじさんに別れるの、悲しいや。」と、清吉は、歩きながら、正二をかえりみて、いいました。

とんぼが、飛んでいました。





## 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「夜の進軍喇叭」アルス

1940（昭和15）年4月

初出：「日本の子供」

1939（昭和14）年7月

※表題は底本では、「海《うみ》が呼《よ》んだ話《はなし》」  
となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 海が呼んだ話

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>